

# 子どもの確かな人権意識を育てる学習について ー将来の「自己実現」に対する意識を高める取組を通してー

奈良県立郡山高等学校 教諭 山岡 昂

Yamaoka Koo

## 要 旨

高等学校第1学年の生徒たちの自己実現に対する意識をどのようにして向上させるかについて考察した。学校行事やホームルーム活動の中で、他者とのかかわりを通して自分自身をとらえ直すことにより、生徒たちは自己肯定感を高め、自己実現に対する意識も高めていった。それと同時に、人権上の諸問題が自らの生き方と深くかかわっていると考える生徒の割合が高くなった。

キーワード： 自己理解、自己肯定感、他者理解、生き方、自己実現、人権意識

## 1 はじめに

高等学校に入学した直後の生徒の中には、自分自身を見つめることができない生徒や、周囲の人や物事への関心が薄いと見受けられる生徒が多くいた。このままでは、生徒たちは自分の生き方を考え、自己実現できないのではないかと感じた。そこで、学校行事や学級活動を人権教育推進の基本的視点である「一人一人の可能性を伸ばす」「一人一人のちがいを豊かさとしてとらえる」「一人一人のつながりを大切にする」という切り口で展開し、生徒の自己肯定感が高め、自己実現への意識を向上させるとともに、人権意識を高めたいと考えた。

## 2 研究目的

生徒の自己実現に対する意識を高める取組を通して、生徒の確かな人権意識を育てる。

## 3 研究方法

アンケート等による生徒の意識調査とその分析を行うとともに、本校の人権教育ホームルームの年間計画に沿いながら、自己肯定感を高める学級活動の在り方について考察した。

## 4 研究内容

### (1) 意識調査および課題発見

#### ア アンケートの実施

1学期に、自分の長所、現時点の希望類型とその理由、希望職業について図1のようなアンケートを行った。生徒が挙げた自分の長所の個数平均は、一人当たり3.32個であった。また、長所を1個も挙げられなかった生徒は2人おり、うち1人は「見付けられない。」と書いていた。また、将来の希望職業の有無で分類すると、希望職業がある生徒(24人)の挙げた自分の長所の個数の平均は3.88個であるのに対し、ない生徒(17人)の平均は2.53個と、少ないことが分かった。

表1は、類型選択の理由を「積極的な理由のみ」「積極的な理由と消極的な理由の両方」「消極的な理由のみ」「未記入」に分類したものである。積極的な理由としては、「英語ができるようになりたい。」「国語や社会や英語が好きで、もっと深く学びたい。」「葉関係の仕事をしたい。」「社会か英語の教師になりたい。」といった理由が挙がり、消極的な理由としては、「理科が苦手。」「数学が嫌い。」「理型は自分には向いていない。」といった理由が挙がった。希望職業がある生徒は、類型選択の理由として積極的な理由を挙げるものが多く、24人中16人(約67%)であり、うち

1年4組	番	氏名
◎自分のいいところ(性格や得意なことなど)を挙げられるだけ挙げてください。		
◎将来の職業として希望するもの、興味あるものがありますか？		
ある → ( )		
ない		
◎文型、理型のどちらに進もうと思っていますか？(今の段階で)		
( )型		
理由:		

図1 アンケート

8人は将来の職業に関連させた理由を挙げていた。それに対し、希望職業がない生徒で積極的な理由を挙げていたのは17人中7人(約41%)であった。また、文型を希望する生徒25人中13人(52%)が、「数学や理科が苦手だから」という消極的な理由しか書いていなかった。

表1 希望職業の有無、希望類型別に見た、類型選択の理由

	全体	希望職業		類型		
		有	無	文型	理型	
理由	積極的のみ	17	11	6	8	9
	積極的と消極的の両方	6	5	1	4	2
	消極的のみ	16	6	10	13	3
	未記入	2	2	0	0	1
合計	41	24	17	25	15	

単位は人数  
文理未定1人

## イ 進路適性検査結果を用いた自己分析

入学時に行った進路適性検査R-CAPの結果に示されたパーソナリティタイプから自分の考え方や行動の傾向を分析させた。そして、示された自分の強みを、自分自身にあてはまるもの、意外だと思うものに分類させた上で、思い当たる体験を考えさせた。多くの生徒たちは、結果を分類することはできていたが、自分の強みとこれまでの成功体験などを具体的に結びつけ、文章できっちりと表現できた生徒は、全体の3割程度であった。

## ウ 課題発見

アンケートや自己分析の結果から、生徒の自己肯定感が低いことが分かった。10月には類型選択という将来の進路にかかわる一つの選択をする時期が控えており、果たしてこのままで将来を見据えた選択ができるのか、疑問に感じた。

そこで、まず生徒の自己肯定感を高めたいと考え、いかに高めていくかを検討した。先行事例として、平成21年度指定研究「子どもの確かな人権意識を育てる学習について」の教材「クラスの生徒の一人一人の良いところを書こう」を用いたホームルーム活動を通して、生徒が「自分でも気付いていない自分の『良い点』を知ることによって『自己肯定感』を高め

る」(杉浦、2009) 取組がある。こういった教材を用い、他者とのかかわりの中で自分自身を見つめる機会を作り、自分の長所をたくさん挙げられるようにすると、将来就きたい職業や、自らの生き方を考えるきっかけになるのではないかと考えた。また、「〇〇が苦手だから」という消極的な理由から類型選択をするのではなく、積極的理由による類型選択をするための自己理解や自己分析の機会となると考えた。

## (2) 他者への関心をもつための取組

自分自身を見つめる機会が必要ではあるが、単に自分のことを考えるだけでは本当の意味での自己理解とはいえない。「自分自身を見つめるためにも、私たちは世界を見つめ、自然を見つめ、社会を見つめ、他の人との関係を見つめる」(森、2010) のであり、周りとのかかわりの中で自分を意識することが必要不可欠であると考え、学校行事をその機会として位置付け、生徒の感想文を集約した。

### ア 外部人材を活用した1年生対象講演会

視覚障害者福祉センターの方に、講演をしていただいた。生徒の感想として、「視覚障害というのは個性であると分かった。」「性格が違いうように身体の特徴が違うだけのことだと分かった。」「一人一人の個性を認め合って協力することは素晴らしいことだと思った。」「本人でないと体験できないことを私たちがどれだけ理解しようとするかが大切だと思った。」などが挙げられた。感想から、8割以上の生徒が、講演者の前向きな発想や考え方に感銘を受け、自分の考え方を前向きに変えていこうと意識したことが分かった。

### イ 文化祭のクラスの取組

文化祭は人間関係づくりやコミュニケーション力育成の機会として位置付け、クラスの舞台発表では、全員が何らかの形で積極的にかかわることを目標に掲げた。

話し合いの結果、4つのグループに分かれ、それぞれでダンスを仕上げ、劇形式でつなげていく形式に決まり、音響、道具の4人だけが裏方で、それ以外の生徒はどこかのグループに入り、ダンスの練習を重ねた。事前に撮影したクラスのCMを舞台に登場するグループの交代時間帯に流すことが決まるなど、「同じやるならとことん、みんなで楽しく!」という流れが自然と生まれた。そのような中、前日リハーサルで、ある生徒が、発表の最後に裏方も含め全員がステージに出て一緒に踊るように提案し、採用された。これは、当初の目標を超え、生徒たちにまとまろうという気持ち、集団として一つになろうという気持ちが出てきた結果であり、裏方として支えていたクラスメイトに目が向いた証<sup>あかし</sup>であったと言える。発表は大盛況で終えることができた。

## (3) 自分を見つめなおすための取組

他者への関心をもつための取組に続き、他者を見つめる中で、自分自身をとらえる取組を実施した。「班という少人数の中で、仲間と協力して活動することの楽しさを知り、話す・聞く活動を通じてコミュニケーション力を高め、意見を交わすことによって様々な考え方があることを知る。その中で、つながりが深まり、互いの個性やよさを認め合うようになる」(時岡、2010) という先行研究を参考にし、グループワーク形式で行った。

### ア オープンキャンパス報告会

生徒たちは、夏期休業中に一人が一校のオープンキャンパスに参加している。進路に向けて具体的な目標をもち、学習意欲を高めるなど、今後の生き方を見つめるためにオープンキャンパス報告会を実施した。単なる報告会でなく生徒同士の活動の機会となるよう、グルー

ブワーク形式で実施した。また、なるべく異なる大学、異なる学部の話が聞けるように、事前に生徒がどの大学のオープンキャンパスに参加したかを調査し、グループ分けを工夫した。

実施の流れは次の通りである。

- ① 班内で各自の体験を報告する。
- ② オープンキャンパスに参加して出てきた、プラスの要素（感動、希望、期待）、マイナスの要素（疑問、不安、心配）を出し合い、まとめる。
- ③ これからの生活について、できること、しなければならないこと、目標などを出し合い、まとめる。
- ④ 班で話し合った内容を代表者が発表する。

報告することで自分を表現し、他者の体験を知り、他者を見つめながら自分の具体的目標を考えるとという流れを作った。今後の目標として、「授業や毎日の予習、復習を大切にする。」「自分がやりたいことを見付ける。」「大学についてもっと調べ、関心のあること、興味のあること、将来やりたいことなどを考えていかなければならない。」「どんな進路に行きたくなったとしても対応できるように学習に取り組む。」など、具体的な学習目標や生活目標が挙げられた。8グループに分けたが、学習目標は全てのグループから、生活目標は5グループから挙げられた。班の代表による発表により、今後の目標をクラス全体で共有することができた。

#### イ 教材『『ええとこ』届け』を用いたホームルーム

10月に入り、類型選択が近付いてきたころ、『『ええとこ』届け』という教材を展開した。これは、『構成的グループエンカウンター事典』（2004）を参考にして作ったものであり、生徒が他者とのかかわりの中で自分自身をとらえ、自分を見つめなおす機会とした。

指導案、使用教材は次の通りである。

段 階	学習内容	学習活動	指導上の留意点
導 入 (5分)		奈良県キャリアノート「あしたのかたち」や担任の体験談から、「長所」を考えると「将来」を考えるとのつながりを考える。	
展 開 (25分)	1 『ええとこ』 届け	・ランダムに配られたワークシート「『ええとこ』を手紙で届けよう！」に、名前の書かれたクラスメイトのいいところをメッセージにして書く。 ・回収、配り直しを繰り返し、合計6人にメッセージを書く。	・注意事項に則し記入するように促す。特に、肯定的なメッセージを書くよう、また、表面的な言葉だけに終わらず、具体的な事例を挙げるように促す。
(5分)	2 『ええとこ』 整理	・ワークシート「私の『ええとこ』」を使って、手紙に書かれた『ええとこ』を、自分でもそう思うことと意外だと感じることに分類する。 ・自分でもそう思うことの中から最もあてはまること、意外だと感じることの中から一番うれしいことをそれ	

(10分)	3 『ええとこ』 シェアリング	ぞれ書き出す。 ・メッセージを書いたり読んだりしての感想をまとめる ・メッセージを書いたり読んだりしての感想を公表しあう。	・生徒が振り返りやすいように、書いてみての感想、読んでみての感想を別々に聞いていく。
まとめ (5分)		・振り返りシートを使って、ホームルームを振り返り、感想をまとめる。 ・自分の『ええとこ』を生かせる職業を調べる。	・職業に就くかどうかは別にして、考えてみるのが大事であることを確認する。

**注意事項**

- ・空いている枠から一つ選び、送り主の『ええとこ』を書く。
- ・どんな小さな『ええとこ』でもいい。
- ・一文で終えず、枠の中に書けるだけたくさん書く。
- ・メッセージを受け取った人が喜ぶことを書く。
- ・表面的な言葉だけに終わらず、具体的に書く。  
 例 「文化祭のとき、  
       「いつも          で、          と感  
                       をじていた、          と  
                       思っていました。」
- ・匿名でよい。
- ・自分宛のものが回ってきたら、周りの人と取りかえる。

**『ええとこ』を手紙で届けよう！**

**◆私の「ええとこ」**      番 氏名

★受け取った「ええとこ」を分類しよう  
 自分でもそうだと思うこと      意外だと思うこと

↓  
最もあてはまること

↓  
一番嬉しいこと

★メッセージを書いたり読んだりして、感じたこと  
 書いてみて      読んでみて  
 (                              )      (                              )

**◆HRのまとめ**      番 氏名

★振り返ろう  
 良い 4    やや良い 3    少し不十分 2    不十分 1

友達の「ええとこ」を挙げることができた・・・

自分に対する理解を深めることができた・・・

もっと自分について知りたくなった・・・

楽しく取り組めた・・・

★その他、HRを通して感じたこと

---

**◆さらに調べよう！**      番 氏名

発見○再確認した自分の長所を  
 生かせる職業について調べる

職業名	生かせられる自分の長所
仕事内容・その他調べたこと	

表2 実施ホームルームアンケート結果

		評価			
		4	3	2	1
質問項目	友達の「ええとこ」を挙げることができた	22	11	2	1
	自分に対する理解を深めることができた	15	15	5	1
	もっと自分について知りたくなった	13	12	8	3
	楽しく取り組めた	33	3	0	0

単位は人数

生徒の感想（書かれた内容で分類）

<p>◎<u>自分自身について</u></p> <p>○HRを通して自分の良いところを再認識することができて良かった。○自分のことを見てくれているうれしさを感じることができた。○自分の意外な面を見付けてもらえて、素直にうれしかった。○書いてもらったことはどれもうれしかった。○自分の長所を知るの、自信がつくと思った。○書いてみると、いつも自分が思っていることを整理できて、良かった。○読んでみて、自分で思っていないことが多く、自分を知ることができた。○ふだんそんなことはないと思うところが書かれていて、そこを伸ばしていきたいと思う。○高校生になってこんな形で自分の良いところが分かってとても楽しかった。○自分は昔から変わってないと思った。</p> <p>◎<u>クラスメイトについて</u></p> <p>○他人の良い所を再確認できて良かった。○ともだちの良いところを挙げていると、良い気持ちになった。○みんなの良い所を考えるのも楽しかった。○人の良いところを探して書くのはおもしろかった。○サラサラと書けた。クラスの人とたくさんかかわれていると感じた。○楽しかった。みんなそれぞれ良いところがいっぱい。○人の良いところは日ごろ見ていないだけで、いっぱいあるものだなと思った。○それぞれの個性があり、書いていてとてもおもしろかった。○クラスメイト全員の良いところをもう一度探したい。○人のいいことを見付けるといのは気持ちの良いものだなと思った。○友達にはいっぱい良いところがあると思いました。</p> <p>◎<u>長所と職業のつながり</u></p> <p>○みんなが自分の良いと思ってくれていることを将来に少しでも役立てれたらいいなと思った。○自分の良いところを生かすことのできる職業につけるようにしたいと思った。○将来、職業につくために、自分の長所を考えるのは良いことだと思った。</p> <p>◎<u>その他</u></p> <p>○また機会があれば、みんなの良いところを書いても面白いかもしれない。書ける自信がある。○またもっと時間がたってからやってみたい。○このような時間はとても大切だと思うし、楽しかった。○1年生の終わりにでも、クラス全員一人一人が全員に一言メッセージのようなことをしたい。</p>
---

生徒は、クラスメイトの長所を一生懸命探したり、受け取った自分の長所を真剣に読んだり、非常に前向きに参加していた。表2にあるように、楽しく取り組めたかどうかの問いには、9割以上の生徒が4段階で一番高い自己評価をしており、否定的な評価をしていた生徒は1人もいなかった。また上に挙げたように、生徒の感想は肯定的な感想ばかりで、長所と将来の職業とのつながりに気付いた生徒もいた。他者理解と自己理解、自己分析をうまくつなげることができたと考える。

(4) 自己理解を自己実現へつなげるための取組

他者とのかかわりの中で、どういう生き方をするかということは、ものごとをどういう感

覚で感じ行動するかということであり、その感性のもと、自己実現はなされるものである。どういふ生き方で自己実現していくのかを考える機会として、2学期の人権教育ホームルームを活用した。

## **ア 障害者問題**

### **(7) 講演会**

奈良県障害者運転者協会の方より「協会の活動状況」「障害者を取りまく環境や制度の現状」について講演をしていただいた。車椅子を車に格納する装置を動画で見たり、障害者専用の駐車スペースやクローバーマークなどについて説明を受けたりした。感想では、約6割の生徒が、障害者専用の駐車スペースについて書いており、そのうち9割以上に「障害者専用の駐車スペースはとても大事なものだ」と分かった。「健常者が車を停めることが許せない。」「世の中の認識が低い。」といった考えが述べられていた。障害者問題が身近なもので、自分自身がどうかかわっていくのかを考える機会となった。

### **(4) ビデオ視聴**

脳性まひをもち車椅子で生活する20歳と18歳の姉妹が、「社会」の現実と向き合い、「障害」と「自分自身」を見つめ直す中で、つまずき、揺れる心を追ったドキュメンタリーのビデオを視聴した。「不便＝不幸」という偏見と「不便≠不幸」という障害者の思いとの間から、他者を通して自分の偏見に気付くということ視聴の目的とし、姉妹がビデオの中で「障害者」に対する世間の「一般的な見方」や周りの反応について述べる一言に注意して視聴するように、事前に生徒に伝えた。少女の「かわいそうと思うやつがかわいそうや。」「障害があってもなくても、不幸な人は不幸やし、幸福な人は幸福や。」という言葉に心を打たれた生徒が多く、約7割の生徒が、「無理に優しい言葉をかけると逆に嫌な思いをさせる場合がある。」「何でも助けることは間違いなんだと思った。」「障害があることは不便ではあるが不幸ではない。」「やってあげるといふ考えを捨てなければならない。」といった障害者の思いを踏まえた感想を書いていた。障害者に対するとらえ方が変わり、自分の尺度だけで物事をとらえることが偏見につながるということに気付かせることができた。

### **(7) 車椅子体験**

奈良県障害者運転者協会の協力のもと、車椅子体験活動を行った。4人ずつのグループに分かれ、介助する側と介助される側の両方の立場を体験した。体験前後で考えが変わった点をまとめさせたところ、約6割の生徒が、「車椅子がこんなに危なくて怖いと思わなかった。」「車椅子に乗るのはとても不安だ。」「介助の仕方が分かった。積極的にサポートしていきたい。」といった感想を挙げていた。一方、約2割の生徒からは「不便だろうと思っていただけ、それは違うということに気付いた。」「全てにおいて不便だということはない。」「車椅子に乗っている人に出会ったら、まず道をあげようと思った。」といった感想が挙げられた。また少数ではあるが、「心遣い、気配りは大事であるが、やってあげるといふ立場ではなく、相手を尊重する立場からの心遣い、気配りが大切であることを、体験活動を通じて感じた。」という感想が出てきたので、その考えを、全体にフィードバックし、クラス全体で共有した。

## **イ 在日外国人問題**

### **(7) 体験学習**

在日外国人問題を考えていくためのホームルームの導入として、グループワーク形式で行えるカードゲーム「バーンガ」を行った。ゲームのルールは、しゃべることが一切禁止され

た中で、配られたトランプのカードを、決められた数字の順に出していくというものである。全体を8つのグループに分け、各ゲームの勝者がグループを移動するという形式で行う。グループごとで、どちらが強いカードかという数字の順番や、入っているカードの種類、勝者の決め方などが少しずつ異なり、最初は各グループそれぞれで全員が同じルールの下にゲームが進むものの、メンバーの交換があった後は、ルールが噛み合わずに混乱が生じ、特に別のグループから移ってきた者は不安になる。しゃべることが禁止されているので、コミュニケーションをうまくとれないままゲームが進んでいく。集団におけるマイノリティ、マジョリティの立場を体験する中で、少数に追いやられる人々の気持ちを知ることが目的であった。ゲーム後、ゲームで体験したような気持ちになるのは実際の生活の中でどんな場面かを考えさせたところ、「自分が外国に行ったとき」「日本に来た外国人」「日本で暮らす外国人」といった意見が出てきた。スムーズに在日外国人問題を考えていける導入となった。

#### (4) ホームルーム「多文化共生」にむけて

日本における多文化多民族社会の現状や歴史的背景について学習した後、在日外国人や外国の文化とかがかわるうえで、自分自身にできることを考えさせた。生徒からは、「自分たちとは違うことを前提として、近付けるようにする。」「まず相手の文化を知ることが大切であり、世界に目を向けるべき。」「受け入れる広い心をもつことが大切である。」といった意見が出てきた。8割以上の生徒から、「押し付けない」「受け入れる」「違いを認める」「広い心」「尊重する」といったキーワードが挙がった。共生の視点で外国人問題をとらえ、自分の生き方を見つめる機会となった。

#### (5) 効果を高めるための工夫

年間の取組を通じて、次の2つのことを実践した。

- ① 生徒がホームルームで書いた感想や考えをまとめて一覧にし、生徒にフィードバックする。
- ② 生徒同士の活動の機会を大切にするため、グループ活動を積極的に取り入れる。話合いの手法として、扱うテーマや内容に対する自分の考えをまとめる機会を事前に設ける。  
①については、同じ題材で同じ体験をしたクラスメイトが、どんなことを感じ考えたのかを知ることが、まさに他者を認めることそのものであり、生徒の感性に良い刺激を与えることができたと感じている。②については、準備した用紙が話合いの素材として使え、スムーズにグループ活動に入っていくことができ、活発な話合いにすることができた。話合いが活発になることは、他者を通じてより自分を理解することにつながると考えられる。

## 5 研究結果と考察

2学期末に意識調査とアンケートを実施した。1つ目は、1学期に行った意識調査(図1)と同じ調査で、自己肯定感がどれだけ高まり、積極的な類型選択ができたかどうかをみる目的で実施した。2つ目は、入学時に行った「人権意識アンケート」の中から項目を選んだアンケートで、生徒がどれだけ視野を広げ自分の生き方を考えることができたか、意識の変化を見るために実施した。

### (1) 自己肯定感と類型選択に関する意識調査

結果として、次の3つが挙げられる。

#### ア 長所の個数の増加



生徒が挙げた自分の長所の個数が、一人あたり3.32個だったのが4.56個に増えた。特に、1学期に希望職業が無いと答えていた生徒（17人）の長所の個数の平均は2.53個から4.53個に増えた。長所を挙げられなかった生徒は0人になり、1学期に長所が「見付けられない」と書いた生徒が1人いたが、その生徒は6個の長所を挙げる事ができた。

## イ 積極的な理由の増加

表3に見られるように、類型選択の理由で積極的な理由を挙げている生徒が、1学期の23名から15名増え38名になり、「未記入」の生徒はいなくなった。1学期は、特に希望職業が無い生徒で積極的な理由を挙げる生徒が少なかったが、2学期末では17人中15人が積極的な理由を挙げられるようになった。希望職業がある生徒で、将来の職業に関連させた理由を挙げた生徒も、1学期の8名から16名に増えた。また、文型を選択した決定的な理由が「数学や理科が苦手だから。」である生徒は、13名から2名に減った。「文型の科目が苦手だから。」という理由で理型を選択した1名を含め、3人が消極的理由で類型を選択したことになるが、全体的に見て、自分自身を見つめ、将来を見据えた類型選択を行ったと言える。

## ウ 希望職業の変化

1学期の段階では希望職業が無かったが、新たに希望職業を見つけた生徒が5人出てきた。新たに挙げた職業は、『『ええとこ』届け』のホームルームで自分の長所を生かせる職業として考えたものと一致していた。生徒たちは、自分の長所を見つめながら職業について考え出しているようである。逆に、1学期の段階で希望職業があった生徒のうち、5人が希望職業無しになった。自分の長所や現実と照らし合わせるなど、職業について以前より深く考えた結果であると言える。

以上のように、「自己を見つめたり他者とかがかわることに重点をおいた指導を行うことにより、児童生徒の自尊感情を高めることができる」（八戸市総合教育センター、2009）という先行研究と同様の結果を得ることができた。加えて、積極的理由で類型を選択した生徒が増えたり、『『ええとこ』届け』のホームルームで自分の長所と将来とを結びつけた感想が出てきたり、希望職業として自分の長所を生かせるものを挙げる生徒が出てきたように、高まった自尊感情が、類型選択という将来の自己実現につなげていく機会に、好影響を及ぼすことが分かった。

表3 希望職業の有無、希望類型別に見た、類型選択の理由

		全体	希望職業		類型	
			有	無	文型	理型
理由	積極的のみ	34 (+17)	21 (+10)	13 (+7)	22(+14)	12 (+3)
	積極的と消極的の両方	4 (-2)	2 (-3)	2 (-1)	4 (±0)	0 (-2)
	消極的のみ	3 (-13)	1 (-5)	2 (-8)	2 (-11)	1 (-2)
	未記入	0 (-2)	0 (-2)	0 (±0)	0 (±0)	0 (-1)
合計		41	24(±0)	17(±0)	27(±2)	13(-2)

単位は人数

( )は対1学期の人数増減

## (2) 人権意識アンケート

図2に見られるように、人権上の諸問題が、自分の意識や生き方と深くかかわっていると考える生徒の割合が大きくなっている。人権教育ホームルームの際に学習した、障害者問題、

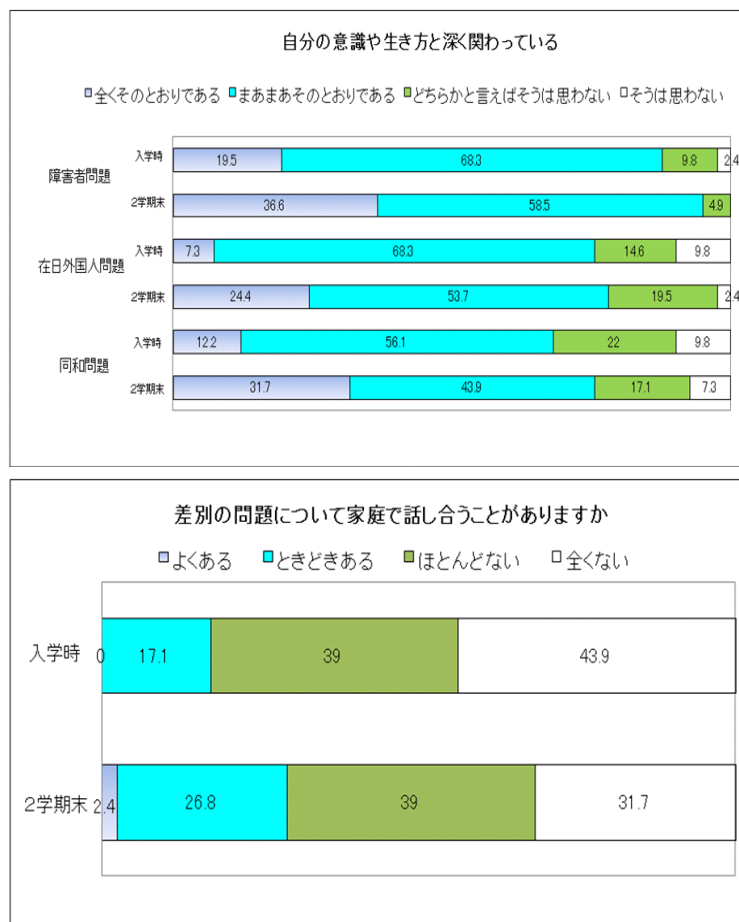
在日外国人問題だけでなく、同和問題においても増加傾向が見られたことは、生徒が幅広い視野で物事をとらえられるようになったからではないだろうか。また、図3は、「差別の問題について家庭で話し合うことがあるか」という問いに対する答えである。入学時に比べ、「全くない」という生徒が減り、「よくある」「ときどきある」と答えた生徒が増えていることが分かる。身近な問題としてとらえ、学習をその場で終わらせず、知識や理解を深めたりしようとする姿勢が見受けられた。生き方を考えるという観点でホームルームを展開していくことが有効であり、学習したことを自分自身の生き方につなげるということが達成できたと言える。

図2 人権意識アンケートに見る生徒の意識変容(1)

## 6 今後の課題

今後の課題として、高まった自己肯定感や人権意識を、3年間の取組の中で、更に向上させること、そして具体的な行動にどうつなげていくのかが挙げられる。具体的には、より豊かな人間関係づくりをするためにワークショップ等の活用、行動力を身につけるための取組の在り方について考察していきたい。

また、類型選択の理由で消極的な理由のみを挙げていた3名の生徒に対して、面談を継続して行いながら、自分の生き方を考えさせていく必要がある。



## 参考・引用文献

- (1) 杉浦美千代(2009)「子どもの確かな人権意識を育てる学習についてー『ともに生きるなかま』としての意識を高める学級経営の在り方ー」『平成21年度 研究集録』 奈良県立教育研究所、<http://www.nara-c.ed.jp/gakushi/kiyou/h21/index.html>
- (2) 森実(2010)「集団づくりがめざしてきたもの・めざすもの」『解放教育』2010 1月号 明治図書、p. 59
- (3) 時岡裕子(2010)「人権教育を基盤とした集団づくりの在り方」福井県教育長嶺南教育事務所、[http://info.pref.fukui.jp/gakukyo/reinan/kenkyu\\_happyoukai](http://info.pref.fukui.jp/gakukyo/reinan/kenkyu_happyoukai)
- (4) 國分康考、國分久子(2004)『構成的グループエンカウンター事典』 図書文化社 pp. 424-425
- (5) 中村、増田、本宮、小又(2008)「自尊感情を高めさせる道徳の指導のあり方～他者とのかわりを通して～」八戸市総合教育センター、<http://www.hachinohe.ed.jp/kyouiku>